様式 C-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年５月３０日現在

機関番号：１２６０４
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０５００５１４
研究課題名（和文）　保育者養成における専門性育成の現状と課題―幼児の体育・運動指導に関して―
研究課題名（英文）　Current Status and Issues in the professional education of preschool teacher training- Physical education, exercise instruction for preschool children -
研究代表者
吉田　伊津美（YOSHIDA IZUMI）
東京学芸大学・教育学部・准教授
研究者番号：３０３３５９５５

研究成果の概要（和文）：
幼稚園教諭は養成校での運動指導に関わる内容を全体的によく学んでいると認識していたが、早期からの専門的な運動技術指導が必要であると考えている者もおり、特に学習度の自己評価が高い者ほどその傾向が高かった。このことから学習内容と理解の内容には食い違いがあることが示唆された。幼稚園教諭は運動指導の専門性に課題を持っており、養成段階では具体的な運動指導のあり方の理解や遊びの体験などの他、現職教育の充実を図る必要性が示された。

研究成果の概要（英文）：
On the basis of our questionnaire it was showed that preschool teachers for the most part, recognized by themselves, that they had sufficiently understood the subject of exercise instruction for preschool children. However, some preschool teachers misunderstood that children should learn specific motor skills from an early stage. This misunderstanding tended to be present among the group of teachers who believed they sufficiently understood the subject of exercise instruction for preschool children compared to those who did not think so. These results showed that there is a discrepancy between what teachers perceive they have learnt and what they actually have learnt. Since most preschool teachers do not have an adequate understanding of exercise instruction, it was concluded that it is necessary to develop in-service training of preschool teachers, in addition to enriching the professional education program at school.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| ２００８年度 | 1,700,000 | 510,000 | 2,210,000 |
| ２００９年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| ２０１０年度 | 900,000 | 270,000 | 1,170,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 3,400,000 | 1,020,000 | 4,420,000 |

研究分野：体育心理学、幼児教育学
科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学　身体教育学
キーワード：幼児、運動指導、保育者養成

## １．研究開始当初の背景

保育形態により幼児の運動能力が異なることが明らかにされている。一斉保育中心の園よりも自由遊び中心の園の方が特別な運動指導を行っていないことが多いにも関わらず、幼児の運動能力が高いのである(吉田ら,2004:杉原ら,2010)。幼稚園においては幼児の

健康や体力づくりに高い関心を持ち、その重要性は認識されてはいるものの、実際の指導は体育専門の指導者にまかせ、特定のスポーツ種目に限定したものや技能の向上を図ることを中心に行なう傾向がみられている。約6割の幼稚園に体育専門の指導者がいることからも保育者自身の健康や体力づくりに関する知識や理解が十分でなく、幼児の体育運動活動が特別なものとして考えられていることが示唆される(吉田ら,2007)。このような幼稚園における運動指導の実態から保育者の専門性に疑問が生じてきた。

## ２．研究の目的

本研究では、このような背景に基づき、以下の3点を目的とした。

(1) 保育者養成校における幼児の体育、運動指導、運動発達などに関する科目のシラバスから専門的知識や指導法等取り扱われている内容を分析、おおよその傾向を把握する。

(2) 幼稚園教諭免許に関連する科目の中で幼児の運動や体を扱った科目について、幼稚園教諭が養成段階での学びのうち、実際の現場で役立ったり有効であると考えるもの、また不十分であったり専門性に欠けると考える内容を明らかにし、1種免許および2種免許所有者で比較する。

(3) これらのことから養成段階および現職教育における課題を明らかにする。

## ３．研究の方法

(1) 養成校シラバスの収集

①対象：幼稚園教員免許状の認定課程を有する大学および短期大学の領域「健康」、幼児体育等幼児の身体や運動に関連する関連する科目のシラバス計244校945科目を収集、573科目を分析の対象とした。

②実施時期：2008年6月～2009年2月。

③調査内容：収集したシラバスに記載されている目的及びねらい、テーマ、目標、単位数、使用テキスト、参考書、授業形態、指導方法、開設期、担当者などの項目とした。

④分析の方法：領域「健康」とその他の幼児の運動に関する科目とに分け、シラバスに記載されている「ねらい・テーマ・目的」に対し、SPSS Text Analysis for Surveys を用いテキスト分析、その後 PASW Statistics 18により主成分分析を行なった。

(2) 幼稚園教諭の学び

①対象：在職後5年以下の幼稚園教諭に質問紙を依頼、684名を分析の対象とした。

②実施時期：2009年7～9月。

③調査内容：所属園の保育方針や運動指導に対する考え方、運動指導の内容と運動指導の担当者および運動指導の方法、保護者の園に対する要求、対象者の養成段階における運動や身体活動に関連する学び、必要性を感じる知識等についてたずねた。

## ４．研究成果

(1) シラバスにみる養成校における幼児の体育・運動指導、運動発達などに関する科目における授業内容

乳幼児の心と体の健康に関し基礎的な内容に関する指導法の科目(保育内容(領域)健康)の中では、体の発達だけでなく、運動遊びの意義を授業内容に含んでいるものがあった。この中で形式的な運動指導ではなく、主体的な活動としての遊び、体を使った遊びである運動遊びについて理解を図り、その指導法が教授されていた。

一方、幼児の運動等の科目では、運動遊びを中心とし理論的な内容だけでなく、実践実技的な内容が多く行なわれていた。これらは保育に即した形での模擬保育のような指導実践型と、遊びそのものを経験することを通して指導や意義を学んでいくという体験型の二つに大別された。前者は、指導案の作成や保育の計画、教材研究、遊びの工夫や展開など、実際に運動遊びを題材としての模擬的に実践していくことを授業に取り入れていると思われる。これに対して後者は、広く生活を通して主体的に楽しく取り組むことを中心に遊びそのものを体験的に学習するという授業内容になっているようであった。

幼児の運動等の科目では、「スポーツ」という記載もわずかだがあった。「スポーツ指導」「スポーツの効用と指導についての理解」などで、「運動遊び」とは内容的に異なるものであった。保育者としてのスポーツ経験やスポーツ指導の理解は、十分な説明がなされないと学生の理解が意図と反してしまう危険性もあると思われる。

(2) 幼稚園教諭の養成校における幼児の体育・運動指導、運動発達などに関する学び

対象は、ほとんどが女性(96.5%)で、このうち1種免許所有者が32.8%、2種免許所有者が67.0%、専修免許が0.2%であった。また対象の所属する園の運動指導は、幼稚園教諭以外の運動指導者がいると回答した者が62.7%で、外部からの派遣による者がその中の7割以上であった。これらは全国的な平均、先行研究とほぼ同様の傾向であった。

①全体の傾向

幼児の体育・運動指導、運動発達などに関する科目で学習した内容については、全体的には各内容に関してよく学んだと判断して

いた。学習の程度が高かったものは「乳幼児期の身体発育の特徴」「乳幼児の運動発達の特徴」「乳幼児の生理的機能の特徴」「領域健康のねらいと内容」などであり、これらはほとんどの者が履修していた「保育内容(領域)健康」で扱う学習内容であった。これに対し相対的に学習の程度が低かったと自己評価していた内容は「運動遊具の特徴（大型・小型・固定遊具・鬼遊び以外もの)」「小学校との連続性（運動発達の連続性など)」「特別支援の子どもの運動指導」「運動遊びの教材研究」「個人差のある場合の運動指導」であった。

一方、養成段階でより身につけておくべきであったと感じている内容、今後さらに理解を深めたいと考える内容については、全体的にそう考えており、学びが少なかったと考えている学習内容に対してのみ特に強く感じているわけではなかった。

②1 種および 2 種免許所有者による比較

幼児の体育・運動指導、運動発達などに関する科目において履修した科目に免許種による違いはみられなかった。

養成校において学習した内容について学びの程度を免許種により比較したところ、ほとんどの項目で 2 種免許の方が 1 種免許よりよく学んだと自己評価しており、28 項目中 20 項目で有意な差があった。差の大きかった項目は、「親子体操などの運動遊び」「運動遊びの指導案の作成」で、この他「特別支援の運動指導」「運動遊具の特徴(固定遊具)」「安全の指導」「安全面の留意点」「運動遊具の特徴（その他)」「運動遊びの模擬保育」の順であった。安全面の指導や留意点、指導案を作成しての模擬保育などのより実践に近い形での内容も 2 種の方がよく学んでいたと評価していた。

一方、幼稚園教諭として保育にたずさわるにあたって、養成段階でより身につけておくべきであったと感じている内容、今後さらに理解を深めたいと考える内容については、免許種による差はほとんどなく、唯一有意な差のあった項目が「運動遊びの教材研究」で、1 種の方が運動遊びに関する教材研究の必要性を強く感じていた。

園で行なわれている運動指導全体についての満足度を見ると(図 1)、2 種免許の方が「とても満足」の割合が有意に高いのに対して、1 種免許は「あまり満足でない」の割合が有意に高く($\chi 2(4)= 22.85, p<0.01$)、全体的には 2 種の方が 1 種免許より満足度は高かった。学んだ通りの内容が保育において展開されているためと考えられる。

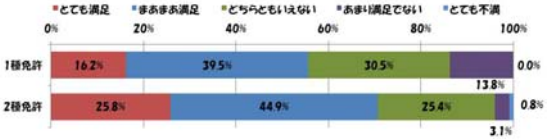


**図 1. 園で行なわれている運動指導全般に対する満足度の免許種による比較**

③1 種および 2 種免許所有者の「幼児期の運動発達や運動指導に関する学習度の自己評価」と幼児期の運動指導との関係

免許種による履修科目の相違はなかったが、学びの程度では全体的には 2 種の方が 1 種よりも自己評価が高かった。そこで、学習内容と幼児期の運動指導の在り方に関する認識を確認するために、養成校で学習した内容のうち運動発達・運動指導等に関わる内容 6 項目を「幼児期の運動発達や運動指導に関する学習度の自己評価」得点として合計点を算出し、免許種により比較した。その結果、学習度の認識は 1 種よりも 2 種免許所有者の方が高かった。また、幼児期の運動指導のあり方についても 1 種よりも 2 種免許の方が、幼児期おける「体力向上のためのマラソン指導」や「早期からの専門的な運動技能習得のための指導」が有意に高く肯定的に考えていた。さらに、小学校入学までに「逆上がり」「跳び箱」「なわとび」を指導するべきであると考えている程度も 2 種の方が 1 種よりも有意に高かった。「運動遊び」については、体力向上だけをねらいとしているわけではないと考えているものの、体力向上のためにはマラソンを行なうことや早期からの運動技能習得のための指導を 2 種の者は肯定的にとらえていた(図 2)。養成段階での教授内容なのか、学習者の理解の問題なのかは明らかではないが、幼児期の発達の特徴を踏まえればふさわしいとはいえない内容であり、理解の自己評価は高いものの実際に理解している内容が適切かどうかは疑わしいといえる。

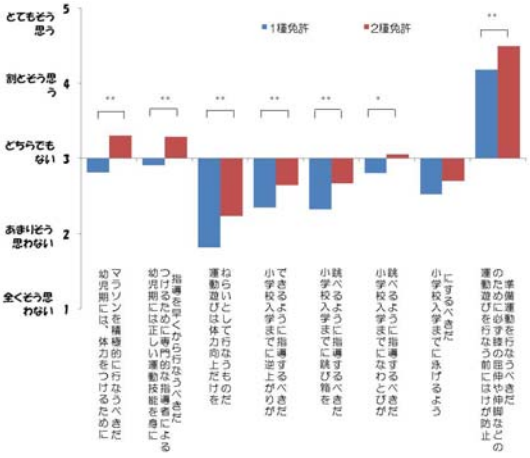


**図 2. 幼児期の運動発達・運動指導の学習度自己評価による運動指導の在り方の免許種による比較**

(3) 幼稚園教諭の養成校における幼児の体育・運動指導、運動発達などに関する学びと課題

①運動指導のあり方についての理解

幼児期の運動指導のあり方については「運動遊び前には防止のための準備運動の必要性」があるという認識を高く持っていた。けがの防止のための対策は必要であるが、幼児期に大人と同じ感覚で「けがの防止を目的」に準備運動を行う必要があるだろうか。子どもは登園してカバンを置いたらすぐに園庭に走って行って遊んだり、一斉での運動活動のために園庭や遊戯室へ行くとすぐに走り始めたり遊具にとびついたりして動いている。運動活動のための動機づけとしての準備運動は行っても、形式的にこれらを行うことは、子どもの発達を十分理解していないとも考えられる。養成校で学んだ内容の中で「乳幼児の身体発育の特徴」はもっとも学習度が高かったと認識している内容であった。このことから詳細な教授内容と学習者の理解度も合わせて検討していく必要があるといえるだろう。

「マラソンを積極的に行なう必要性」や「早期からの専門的な技術指導」については、全体的には「どちらでもない」という認識、つまり否定的でも肯定的でもなかった。養成校で学んだ内容のうち「乳幼児期の運動発達の特徴」は2番目に学習したという認識が高かった内容であった。乳幼児期の運動発達の特徴を理解していれば、これらの設問に対して「そう思わない」と回答すると思われる。このことから、学習したという記憶はあっても十分な理解があっての学習かどうかは疑わしいといえる。

このことについて「早期からの専門的な技術指導」の必要性高群と低群を比較したところ、小学校までに逆上がり、跳び箱、なわとび、水泳を出来るように指導すべきであるかどうかの考え方に差があった(図 3)。この差は必要性高群が指導に対して肯定的であるというよりも、必要性低群がより否定的であることによる差であった。つまり、専門的な運動技術指導を早期から行なう必要があると考えている者は、これらの技術指導に対して曖昧な回答しか持ち得ないのに対して、専門的な運動技術指導は早期から必要でないと考えている者は、逆上がりや水泳など具体的な運動種目に対してその必要性はないと明確な回答を持っており、幼児期の運動指導に対して理解が図られていると思われる。このことは二つの可能性を示唆しているといえるだろう。一つは積極的に推奨する立場ではない者が、専門の運動指導者による指導が技術指導中心の場合にそれを容認してしまう可能性である。極端な技術指導に偏った取り組みに対し違和感を持たないとすれば、養成段階での学習が十分ではなかったことが考えられる。もう一つは、幼稚園での保育内容に対して具体的な方針を持ち得ておらず、その内容を保護者に対して十分に説明出来ないという可能性である。このことは同時に保護者の運動の習い事方針に対して適切な助言ができないことにもなると考えられる。

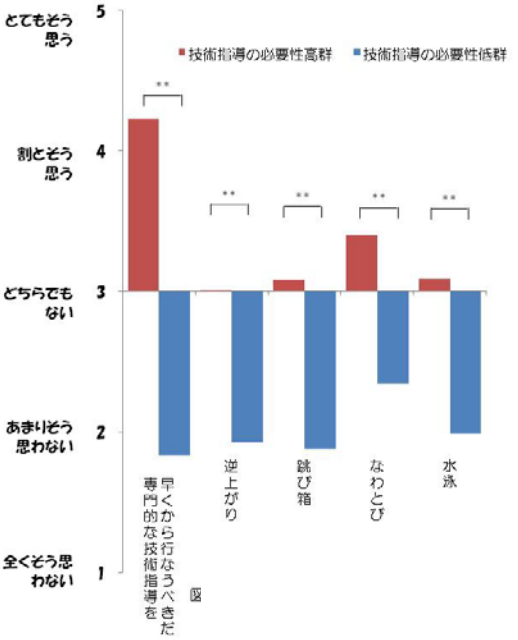


**図 3. 技術的な専門指導の必要性による各種技術指導の比較**

②運動指導における課題

運動指導者による運動指導に対する満足度は9割近くが満足と回答しており、非常に高かった。一方、運動指導者のいない場合も含め、園全体で行われている運動指導については満足している者が6割強であり、運動指導者のいる場合に比べ満足度は低かった。運動指導者に対する満足の理由としては「専門的にとても勉強になる」「運動知識に優れている」があげられていたが、一方で運動指導者に対しては「言葉がけが不適切」「待つ(話を聞く)時間が長い」という理由もあった。これらはごく少数の回答であったが、実際にこのような指導者がいることは否めない。単なる体育だけが得意な専門家がいればよいというのではなく、幼児期の発達を理解した人格的にも子どものモデルとなりうる指導者が望まれる。

園全体での運動指導では、教諭自身の「指導の限界(専門性の欠如)」「物理的な環境要因」に問題を抱えていた。養成校では「運動遊びの意義」や「具体的な運動遊びの内容と展開」をはじめ運動指導の留意点や運動遊具に関しても学んでいると認識しているものの、実際にはこれらに対し課題を持っているようである。運動指導を行うにあたって環境

の工夫や指導の在り方に限界や戸惑いを感じていることが考えられる。実践の場を重ねることで見えてくる課題もあると思われる。

子どもはできることで達成感や満足感を感じ、自信を得ていく。極端な技術指導偏重は問題があるが、タイミングを見計らって最適なコツを指導することができれば子どもは意欲を持って運動に取り組むようになる。近年、幼児体育指導者の養成が学会や団体等で行なわれているが、幼児の発達を理解した幼児体育の専門家が保育の中に効果的に入ることができれば、幼児の運動遊びをより豊かにする一助になると同時に、保育者の力量を高めていくことにもつながると思われる。

③養成段階での課題

養成段階での幼児の運動や体を扱った内容の学びについては、全体的にはまあまあ学習したと考えているようであった。しかし、幼児期の運動発達の理解や、それを踏まえた指導の展開については十分な理解が図られているとはいえなかった。このことは、運動会の内容からも示唆された。運動会の構成が非常に多くの園で特別な構成でそれに向けて色々な種目の練習をしていた。このことから養成段階においては幼稚園教育の中に運動指導の位置付けを強調して伝える必要があるのではないかと思われる。幼稚園教育の基本、すなわち遊びを通しての指導が理解されていれば、どのような形態、どのような内容の活動であれ遊びとしての活動がふさわしいと考えるはずである。運動指導においても特別なものではなく、遊びとしての運動が保育の中に位置付けられるはずであろう。

今後さらに理解を深めたいと思う学習内容はすべての内容でその必要性を感じていた。特に、養成段階での学びが相対的に低かった内容として、「小学校との連続性」「特別支援の運動指導」「運動遊びの教材研究」「個人差のある場合の指導」があった。幼稚園教諭が今後さらに理解を深めたいと考える学習内容についてもこれらは必ずしも高くなく、小学校への見通しを持って保育内容を構築していくという認識は低いとも考えられる。今後は「発達や学びの連続性を踏まえた幼児教育」の立場から運動のあり方を位置づけて理解を図っていく必要があるだろう。また、「運動遊びの教材研究」は大学生になるまで遊びの経験が乏しい学生もいることを考えると、養成段階で遊びの体験や素材の工夫の仕方などの経験も養成段階で取り入れる必要があると思われる。この他「特別支援」「個人差」など個別の事例に応じた難しさもあるが、いくつかのケースを示しながら具体的な形で示すことも必要ではないかと思われる。

④現職教育における課題

1 種免許と 2 種免許とで養成段階での学びについて比較したところ、多くの項目で 1 種に比べ 2 種の方が良く学んだと評価していた。併有免許および資格を見ると、1 種は小学校教諭免許併有率が高く、2 種は保育士資格の併有率が高かった。このことから、2 種の方が幼児教育保育に特化した内容であるのに対し、1 種は小学校と幼稚園という学校教育に重点をおいた養成内容であるとも考えられたが、養成校で学んだ内容のうち 1 種の者も「小学校との連続性」については、どちらかというとあまり学んでいない内容であると評価されていた。

そこで、「幼児期の運動発達や運動指導に関する学習度の自己評価」得点を比較したところ、2 種免許の方がよく学習していると自己評価しているにも関わらず、運動指導のあり方については、早期からの専門的な技術指導や体力向上のためにマラソンが適しているなど、幼児期の運動発達を十分理解しているとはいえない結果であった。少なくとも本人が学習したと認識していてもその理解の内容が十分かどうかは明らかではないといえる。先にも述べたが、幼児期の運動発達を理解し、幼稚園教育の基本を理解していれば、運動技術指導に対してどのような形がふさわしいか明確な回答を持ち得るはずである。しかし、学習内容の理解が十分でないと極端な運動指導も受け入れてしまう危険性がある。

養成段階においては基本的な内容を学習していると思われる。しかしその理解に差があるとするならば、教諭となった後も継続して教育の場を保障していくことも必要ではないかと思われる。特に、幼稚園教諭は他校種に比べて 2 種免許の比率が圧倒的に高い。単に上級免許が良いということではないが、養成段階において 1 種に比べ 2 種では履修単位数が少ないことを考えれば、養成段階でのプログラムだけでなく、現職教育の立場からの積極的な取り組み、さらなる充実も必要といえるだろう。

(4) まとめと今後の展望

養成段階の幼児の運動等では基本的な事項が中心となるであろうが、運動指導のあり方、遊びの意義に関しては改めて学生の十分な理解を図る必要があると思われる。一部これらについてはシラバスにおいて扱っているものもみられたが、これら基本的な内容の理解がなされていれば、極端な運動指導の内容や形態がとられるようなことはないと考えられる。また、「小学校との連続性」についてはあまり学習されていないようであった。シラバスにおいてもこの語は見られず、「発育発達」などに包括されているかもしれ

ないが、今後は発達や学びの連続性を踏まえた幼児教育の立場からの幼児の運動等の位置づけも必要であるといえるだろう。さらに「運動遊びの教材研究」も学習の度合いも相対的には低かった。シラバスにおいては指導案の作成や保育の計画、教材研究など、実際に運動遊びを題材としての模擬的に実践していくことを授業に取り入れている内容も一部には見られた。このような授業内容がある一方で、あまり行なっていないところもあるため、全体としては学習の度合いが低いという結果になったことが考えられる。子どもの実態に応じた指導を行なっていくためにも、また運動指導者がいる場合にその指導者との効果的な連携を図っていくためにもこのような指導実践型の授業内容も保育者養成段階では必要ではないだろうか。

なお、「特別支援」「個人差」については学習の程度は相対的に低く、シラバスにおいてもこの表現は見られなかった。幼児の運動等においては基本的事項が中心となるであろうが、これらについて授業内容に組み込んで行く必要もあると思われる。

免許種による学習度の比較では２種免許状所有者の方が１種免許状所有者よりもその度合いが高いと評価していた。しかし、運動指導のあり方については早期からの専門的な技術指導や体力向上のためのマラソンが好ましいなど、その理解内容が適切であるかは疑わしかった。一部シラバスには「スポーツ」と表記されているものもあったことから、養成側が誤解のないように学生の理解を図ることを徹底していくことが必要であろう。幼稚園教諭は小学校等他校種に比べて２種免許の比率が圧倒的に高い。養成段階において１種に比べ２種では履修単位数が少ないが、もしこのような誤解が授業時間数に関連しているとするならば、養成段階でのプログラムだけでなく、現職教育のより一層の充実を図る必要もあるといえるだろう。

今回はシラバスより養成校における授業内容についておおよその把握を試みた。しかし、シラバスには文字数等の制約等もあり、これだけで授業内容全てを把握することには限界があった。今後はシラバスに記載された内容がどのように教授され、その内容が学生にどのように伝わっているかを明らかにすることが課題であろう。シラバスに記載された内容についての養成側の意図を明らかにし、具体的な教授内容が明らかになれば、学生の学びの内容や学びと理解の齟齬がより明確になるのではないかと思われる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計１件）

①吉田伊津美・岩崎洋子、幼稚園における運動指導の実態と教員の運動指導に対する意識―国公立幼稚園と私立幼稚園との相違―、日本発育発達学会第８回大会、2010年３月28日、山梨大学（山梨県）

６．研究組織

(1)研究代表者

吉田　伊津美（YOSHIDA　IZUMI）

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：３０３３５９５５

(2)研究分担者

岩崎　洋子（IWASAKI　HIROKO）

日本女子大学・家政学部・教授

研究者番号：９００６４３７８